

黙示録2章18－29節 「背教の教会」

1A 燃える目と真鍮の足 18

2A 愛の行い 19

3A イゼベルという女 20－23

1B 淫行と偶像礼拝 20

2B 悔い改めの機会 21

3B 死病と大患難 22

4B 思いと心を探る方 23

4A 残りの者たち 24－28

1B 他にない重荷 24－25

2B 諸国の民の支配 26－27

3B 明けの明星 28

5A 御霊の宣告 29

本文

今朝は、黙示録 2 章 18 節から 29 節までを見ていきます。私たちは今、黙示録で、アジアの七つの教会に対する、主イエスのことばを読んでいます。前回、エペソ、スミルナ、そしてペルガモンにある教会に対する使信を見ました。今朝は、ティアテラの教会へのことばです。(全文を読む)

私たちが 2022 年 11 月に、トルコとイスラエルへ聖地旅行に行った時、ティアテラの町を訪れました。小規模な地方都市アヒクサルの中に遺跡がありますが、七つの教会の遺跡で、最も小さいものの一つです。フィラデルフィアも小さかったですが、同じくらい小さいです。当時も、小さい町でした。そして、今読んだように、信仰を健全に保っているのは、その中でも本当にわずかです。しかし、イエスのことばは、七つの教会の中で最も長くなっています。主は、小さき者たち、数少ない者たちにもその確かな信仰、忠実な信仰のゆえに、多くのことばを持っておられることを知ることができます。主は、小さき者、数少ない群れでも、その信仰を見て、目をかけておられます。

1A 燃える目と真鍮の足 18

¹⁸ また、ティアテラにある教会の御使いに書き送れ。『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝く真鍮のような神の子が、こう言われる—。

ティアテラの町は、ペルガモンの教会から南東に約 65 キロメートルに位置する町です。この地域の中心都市ペルガモンや、次に出て来るサルディス、それからエペソをつなぐ交通の要所でありました。歴史的には、他の町と同じです。ギリシア帝国からペルガモン王国の中に入り、そしてローマ帝国

に組み込まれました。

ティアティラが小さな町であったのは、ここが、リュウコス川沿いの肥沃な平原に町がつくられているからです。つまり自然の要害がないのです。外部の攻撃から自分たちを守ることがなかなかできない難所でした。それで、戦争が起こるごとに攻撃されて何度も町が壊されたそうです。そこで、東方からの敵軍が首都ペルガモンに進軍するのを遅延させる駐屯地となりました。

しかし、交通の要所であることから、商業の町として発展します。パウロが第二次宣教旅行を始め、初めてヨーロッパに入ったピリピの町での出来事を思い出してください。パウロが安息日に祈り場で、川岸のところに行きそこで福音を語りました。そして使徒 16 章 14 節にこう書いてあります。「リディアという名の女の人が聞いていた。ティアティラ市の紫布の商人で、神を敬う人であった。主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた。」リディアという女が信仰を持ちましたが、彼女はティアティラから来た紫布の商人でした。町が破壊されてきた歴史を持つ市民たちは、生き残るために一致団結する結束力を強めて行きました。そこで、同業組合（ギルド）が誕生しました。この町には羊毛、紫布、亜麻布、衣服の他に、土器、銅細工、染料などの多くの組合があったそうです。イエスが、ここでティアティラの教会に語られている中に、これらの商品のことを思い起こさせる表現が多く出てきます。

ティアティラには、スミルナやペルガモンにあるような皇帝崇拜はありません。しかし、ギルドが経済活動の中心であり、その中で享樂もあり、偶像礼拝もあり、性的淫行がありました。しかし、そうした場に自分も参加しなければ、ギルドに留まることができず、それでキリスト者は強い圧迫を受けていたのです。私たちも会社の飲み会などで、やりたくもないことをさせられることがありますね。「生きるためには仕方がない」という言葉を人は使いますが、主に与えられた良心に逆らうことはできません。けれども、このようなことをしてもよい、という偽りの教え、偶像礼拝と淫らな行いを取り入れる教えを、一人の女預言者によって広められていった、というのが背景です。

ペルガモンにある教会の問題は、「妥協」でした。イエス様は、「あなたは少しばかり責めるべきことがある」と言われました(2:14)。全体としては、殉教したアンティパスのように、迫害されても信仰を棄てなかった忠実さがありました。しかし、ティアティラにある教会は、女預言者のせいで、教会全体がその教えに染まってしまいました。

ここで、イエス様はご自身を、「燃える炎のような目」を持っていると紹介されます。主が、ヨハネに現れた時の一部の姿であります。これは主が、「どんな隠れたことも見ておられて、明るみに出して、それを裁かれる」という意味合いです。主なる神は、燃える炎で不義を行なう者たちを焼き尽くされました。預言者エリヤを捕えに来た者たちが、天からの火によって焼き尽くされたことを思い出してください(2列王 1 章)。主は、火をもって来られる、裁かれることが、新約聖書にも書かれ

ています(Ⅱテサ2やⅡペテロ3章)。

そして、「その足は光り輝く真鍮」とあります。エゼキエル書のケルビムの上に座しておられる主の姿にも、その足が光り輝く真鍮でした。これは天の純粹さが、地においては裁きとなって現れることを意味します。

そして、主がご自身を、「神の子」と言われています。ティアティラの人たちは、アポロを自分たちの守り神としており、「神の子」と呼んでいましたが、いいえ、主ご自身が神の子として現れています。イエス様は地上におられる時、人の子とご自身を呼ばれていましたが、悪霊どもが、「いと高き方の子」と叫び、それを主は黙らせました。またペテロが、イエス様を「生ける神の御子キリスト」と告白した時に、それを他の者たちには言わないように、と戒められました。

このように、地上においてへりくだるお姿があるのですが、しかし信じる者には神の子として現れてくださり、そして世界に対して再臨の時に神の子として現れるのです。主がここで語られているのは、詩篇2篇が背景にあります。「2:7-9 「私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。9 あなたは鉄の杖で彼らを牧し陶器師が器を砕くように粉々にする。』」この、「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」というのが御子の宣言です。そして、戻られる時に諸国の軍隊をことごとく打ち砕き、そして鉄の杖で強く治められるのです。

2A 愛の行い 19

¹⁹ わたしは、あなたの行い、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている。また、初めの行いにまさる、近ごろの行いも知っている。

主は、他の教会に対するのと同じように、「知っている」から始めておられます。主は、他の人が認めなくとも、私たちが認めてくださいます。ここで注目すべきは、エペソに対するイエスの言葉、「初めの愛から離れてしまった」という言葉と対照的なことです。愛と信仰、また奉仕に優れていて、初めの行ないよりも優っているのです。最も大事なこと、愛することを第一として、そして愛による信仰の働きがありました。それが、人々に惜しみなく分かち合う奉仕へとつながっていました。そして、奉仕するにあたって労苦が伴いますが、耐え忍んでいます。なんと、模範的な姿でしょうか！

3A イゼベルという女 20-23

ところが、エペソの教会とは逆の問題がありました。エペソにおいては、偽教師が入ってきても我慢せず、追い出したのですが、ティアティラは、偽預言者を何ら試すことなく、受け入れました。

そういうことがあり得るのか？とってしまいますが、事実、教会史でそれが起こっていましたし、今もあります。カトリック教会はその代表的な存在でしょう。すばらしい愛の奉仕、信仰の証しが個々にあったにも関わらず、教皇や司祭の間で、世の権力と腐敗と何ら変わらない、恐ろしいことが平然と行われました。ごった煮と言いますか、愛の行いもあって、かつ腐敗もあったのです。しかし教会は、どちらも欠けてはいけません。愛と聖さのどちらもなければいけません。「ロマ 12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。」

1B 淫行と偶像礼拝 20

²⁰けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは、あの女、イゼベルをなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。

ここにある、「なすがままにさせている」が、ティアティラにある教会の大きな問題でした。ペルガモンにある教会では、悪と戦っていましたが、わずかな妥協がありました。けれども、ティアティラにおいては、なすがままにさせる。つまり、その教えを試すこともなく、悪魔に立ち向かうこともなく、そのまま受け入れていったのです。

私たちの信仰には、「戦う」という要素があります。ユダの手紙に、こうあります。「3-4 愛する者たち。私たちがともにあずかっている救いについて、私はあなたがたに手紙を書こうと心から願っていましたが、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。4 それは、ある者たちが忍び込んできたからです。彼らは不敬虔な者たちで、私たちの神の恵みを放縱に変え、唯一の支配者であり私たちの主であるイエス・キリストを否定しているので、以下のようなさばきにあうと昔から記されています。」神の恵みを放縱に変えた、とあります。戦いをやめると、たちまち、神の恵みが放縱へと変わってしまいます。

「あの女、イゼベル」であります。明らかに、旧約聖書の人物イゼベルを指しておられます。この女は、教会において預言者を自称していました。多くの者たちが彼女のことばと働きを受け入れていましたが、主はそのように見ておられませんでした。その名が示すとおり、その女預言者は、預言者エリヤを神が遣わされた理由ともなった女、イゼベルと同じ事をしていました。

イゼベルは、北イスラエルの中で前代未聞の悪を行かせた黒幕、張本人であります。シドン王の娘でありましたが、イスラエルの王アハブはヤロブアムが建てた金の子牛だけでは飽き足りず、シドン人の拝むバアルを拝み、仕えました。そしてイゼベルがイスラエルに来てからというもの、サマリアにバアルの宮を建て、祭壇も築きました。そして、イスラエル人たちが国民ごぞって、バアル礼拝をするようにさせたのです。しかし、シドンとの交易によって国は豊かになりました。イスラエル人は国が豊かにされているのだから、大きな問題ではないと思っていたことでしょう。これがティ

アテラの教会でも起こっていたことです。異教における忌まわしい慣わしが、商売の名の下で、教会でも許されるということ、この女は教えていたのです。

そして、「わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている」と主は言われています。主のしもべであっても、淫らなことを行ない、偶像に献げた物を食べていたのです。かなり衝撃的なことです。ところで、これは、忌まわしい行いをしてはいけなさと分かっているのに、罪を行っていたのではないのです。その罪を罪とせず、行ってよいのだということ、を教えにしてしまったのです。悪い行いを、良いこと、正しいこと、神からのものとしてしまったのです。これが、妥協と背教の違いです。妥協は、正しいことを知っていながら罪を行っている姿です。背教は、正しいことを悪とし、悪を正しいこととすることです。

2B 悔い改めの機会 21

²¹ わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は淫らな行いを悔い改めようとしない。

ここに主の忍耐が記されています。主はご自分の憐れみによって、人々を悔い改めに導かれようとしています。「ロマ 2:4 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」、私たちは主の憐れみの中で早まった判断をせず、主が明らかにされるまで忍耐して待つことが必要です。ところが、彼女は悔い改めません。それは、他の愛と信仰、奉仕と忍耐の行ないという雰囲気の中で、巧みに覆い隠されています。しかし、主はこれを覆いかくれたままにすることはありません。「1テモテ 5:24 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。」

3B 死病と大患難 22

²² 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ込む。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。

主は、報いを与えられます。女またそれに追従する者たちは、床を淫行で汚していました。それを、「病の床」に投げ込まれます。当時、食事をする時、古代ローマの「トリクリニウム」という、寝そべって食べる方式がありました。コの字にテーブルがあり、その周りに横たわって食べます。イエス様が、弟子たちと最後の夜、過越の食事を取られた時も、その方式で食べていました。そのような場で、異教の偶像礼拝と淫行が行われていたのです。ですから、食べている席がそのまま床にもなり得る状況で、そこを「病の床」にすと言われているのです。これは、具体的には性病にかかることでしょう。コリントの教会においても、近親相姦を犯している男が、「Iコリ 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。」とあります。

そして次に、「大きな患難の中に投げ込む」とあります。これは、彼らが大きな苦しみに陥るとい

うことですが、その時だけでなく、終わりの日の大患難のことを指し示していると思われます。「教会が大患難を通るのか？」という問いに対して、キリスト者の間で議論があります。携挙があるから大患難を通らない、いや通るのだ、という意見の分かれがあります。私はこう考えます。ここにあるように、偽りの教えを受け入れている、また初めから救われていないけれども形だけは敬虔を装っている者たちは、教会にしようとも大患難を通る、ということです。「Ⅱテサ 2:3 まず背教が起こり、不法の者、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。」信じていると言っても、実はイエス・キリストを否認しているような者たちは、形だけは教会というものが残り、大患難に投げ込まれるのです。黙示録 17 章には、大淫婦バビロンと呼ばれる宗教統合体が現れます。

私たちは教会にいるからといって、そのまま救いが保障されているわけではありません。多くの人が、主よ、主よ、と御名を唱えているのに、主は彼らのことを「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。(マタ 7:23)」と言われます。信仰から離れる者たちが出てくることを、パウロはテモテに語りました。「Ⅰテモ 4:1 しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わず霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」ヨハネは、第一の手紙で、偽教師たちのことを反キリストと呼び、彼らが教会から離れて行ったことを書いています(2:19-20)。

そして、終わりの日には好き勝手に教師たちを集めるとパウロは預言しました。「Ⅱテモ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。」この前の合同修養会で、ある方がディスカッションで、「これは、今の時代、インターネットで、ユーチューブで、好き勝手に教師たちの説教を聞いているが、その基準は自分自身になっていることはないか？」と問いかけていました。自分自身を愛するようになるのが、Ⅱテモテ 4 章に書かれている、終わりの日の特徴です。

4B 思いと心を探る方 23

²³ また、この女の子どもたちを死病で殺す。こうしてすべての教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知る。わたしは、あなたがたの行いに応じて一人ひとりに報いる。

「この女の子どもたち」というのは、女の教えを受けた継承者たちのことです。彼らは、その教えによって死病をもって主によって裁かれます。そして主は、「すべての教会」と言われていますね、これを見せしめとされます。全ての教会に知られることになり、それで人々が主を恐れるのです。神の聖さに対する恐れを抱くことは健全です。ペテロが、アナニアとサツピラに対して主の裁きを宣言して、それで彼らが死にましたが、「使 5:11 そして、教会全体と、このことを聞いたすべての人たちに、大きな恐れが生じた。」とあります。

そしてここにある、「人の思いと心を探る」であります。正確にはギリシア語で「人の心と腎臓を探る」となります。ユダヤ人にとって、人は心で思い、そして内蔵で感じるとされていました。したがって、人々には覆い隠されていて、誰にも築かれないような暗闇の業も、主はことごとく探られる方なのだ、ということです。そして、「あなたがたの行いに応じて一人ひとりに報いる」とあります。主は公正な方です。連帯責任ではなく、それぞれ主が任せておられることに従って、各々に報いを与えられる方です。

4A 残りの者たち 24-28

1B 他にない重荷 24-25

²⁴ しかし、ティアテラにいる残りの者たち、この教えを受け入れず、いわゆる「サタンの深み」を知らないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。

「しかし」という接続詞から始まります。ここまでは、教会が腐敗し、背教している状態を明らかにしておられました。しかし、主はご自分に忠実な者たちを残しておられます。イゼベルの教えについて、「「サタンの深み」を知らない」とあります。偶像や淫行だけでなく、オカルトの要素も含まれていました。それを「知らない」とありますね。悪いことには疎くあってよいのです。「ロマ 16:19b-20」なお私が願うのは、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあることです。平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。

ここで、「ほかの重荷を負わせない」とあるところが大事です。教会が大患難にはいつてしまうような状況になっているが、しかし、あなたがたが教会を改革せよとか、ほかの重荷を負わせないとされています。

²⁵ ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。

彼らは、新たに重荷を負う必要はなく、ただ福音をそのまま持っていることであります。それ以上のことをする必要はありません。「2テモテ 1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」

2B 諸国の民の支配 26-27

²⁶ 勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。²⁷ 彼は鉄の杖で彼らを牧する。土の器を砕くように。^{28a} わたしも父から支配する権威を受けたが、それと同じである。

勝利を得る者たちに対する約束です。エペソにおいては、神のパラダイスにおけるいのちの木の

実でした。スミルナにおいては、第二の死からの救いでした。ペルガモンに対しては、隠れたマナ、新しい名の記されている白い石でした。そしてティアティラに対しては、「諸国の民を支配する権威」であります。

このことを説明する前に、「最後までわたしのわざを守る者」とありますね。主が来られる時まで、その最後まで守る者ということです。私たちは初めに走っている時をいつも注目します、しかし、最後まで走ったのか、完走したのかが大事です。(ヘブル 3:13-14 参照)

そして、「諸国の民を支配する権威」であります。これは初めに読んだ詩篇第二篇の続きであります。「2:9-11 あなたは鉄の杖で彼らを牧し 陶器師が器を砕くように粉々にする。』それゆえ今王たちよ悟れ。地をさばく者たちよ慎め。恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ震え子に口づけせよ。」神の御子に対して、地の王たちが口付けして仕えます。このキリストと共に統べ治める権威が与えられるのです。そして、ティアティラが、軍の守備隊が置かれていた町であったことを思い出してください。ですから、信者にとって、主ご自身がすべての軍隊を滅ぼし、国々を支配する力が与えられるというのは、大きな慰めだったでしょう。

そして、「わたしも父から支配する権威を受けたが、それと同じである。」とありますね。父なる神が御子と一つになっているのと同じように、私たちが神とキリストと一つに交わるので、その権威が私たちにも任されるのです。私たちはイエスへの小さな信仰かもしれないけれども、そこには、世界を支配する権威が任されています。その備えを今、行なっています。

3B 明けの明星 28

^{28b} また、勝利を得る者には、わたしは明けの明星を与える。

キリストご自身が明けの明星と呼ばれています。「2ペテロ 1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」明けの明星は、暗い夜において光の始まりであり、そしてそれが太陽となり輝く、希望の光であります。その光に、私たちもキリストと一つになっていることで輝くのだということです。

5A 御霊の宣告 29

²⁹ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。』

全ては、御霊が語っておられることです、そして聞く耳があるかどうかであります。祈り、私たちの耳がいつも御霊に開かれているように祈りましょう。